

入院中の衣服の選択理由と衣服が闘病意欲に与える影響要因の考察 Examining the Reasons for Selecting Clothes during Hospitalization: Factors of Clothes' Influence on the Will to Fight against Disease

田中 里奈・若林 たけ子・東中須 恵子
Rina Tanaka, Takeko Wakabayashi, Keiko Higashinakasu

要旨

本研究では、入院中の患者が衣服を選択する理由について明らかにし、その衣服が闘病意欲に与える影響について考察することを目的とした。

対象は衣服の自由選択を前提に病衣貸与体制を導入している Y 総合病院に入院中で、研究協力を承諾が得られた患者62名。方法は患者のベッドサイドで質問紙に基づいた聞き取り調査を行った。対象となった入院患者62名中、妊婦を除く男性24名、女性30名の計54名を分析対象とした。分析は Microsoft Excel を用いた統計処理と t 検定、 χ^2 検定、及び記述的に分析した。

対象の特性は、病衣選択者74.1%で、t 検定 5 % 水準で女性の方が病衣の着用が有意に高い集団であった。これは入院対象者が家族と同居している割合が88.9%と高く、そのうち85.2%が家族に洗濯を依頼していたことが影響しているものと考えられる。私服を選択する理由は、病衣に対する抵抗感と、デザインやカラー、サイズが選べて動きやすい、着心地が良いために落ち着くなどの私服としての得点に二分されていた。病衣に対して不満を持っている割合は50%であったが、性別では女性のほうが男性よりも20%以上高かった。これは、一般的に合理性を重視するといわれている男性特有の性格的なことが影響しているのではないかと考える。病衣に対する不満理由は恥辱感、個の尊厳の喪失感、不合理性、不快感の4つの因子とその他で構成されていた。これは不満理由として女性から多く挙げられていたことと、清潔、耐久性、利益などの病衣としての特徴を備えていることではないかと考える。衣服と闘病意欲と性別との関係では、男性よりも女性のほうが闘病意欲は高く、病衣と私服と闘病意欲の関係では病衣のほうが χ^2 検定 1%水準で有意に低かった。これは女性のほうが、退院後も家庭での役割を持つためと考えられる。また、私服は社会性を維持していくために影響しているものと考えられた。

以上から入院中でも、個の尊厳を維持できる衣生活を心がける事が重要である。

キーワード：病衣・寝衣、病衣貸与加算、病衣貸与体制

I. はじめに

衣服は、生理的、心理的、社会的にも大きな意義を持ち、私たちの心と身体健康維持のために大きな役割を果たすと考えられる。しかし、入院中の患者は、衣服を選択する中で病衣・寝衣に限定されていることが多く、心理的、社会的に大きく制約されていることが多い。入院中であっても、その人に応じた快適な衣服を着用することは

生活の質を向上し、人生の楽しみや意味を見出すことに関わっているのではないかと考えた。

齊藤ら⁽¹⁾は、私たちはこの世に生を受けた直後から、産着、おむつなどの衣服を身につけて、体温を維持し危害から身を守っている。また、さまざまな色や形の衣服を着ることにより、自分らしさや喜び、悲しみを表現する。人は、着るものによって気分やその振る舞いも変わってくるのである、と述べている。また、林⁽²⁾は「衣」について、氏家や稲光らを引用して「衣」「食」「住」は人間生活の営みの3大要素であり、その中でも特に衣生活は他の生物にはみられない人間特有の生活行為であり、個々人の衣生活はその人なりの生活文化を表現しているといえる、と述べている。

すなわち、「衣」は人間として生きていく中で、不可欠なものであると同時に、最も尊重されるべきもののひとつである。したがって、看護ケアにおいては、生理的な機能を損なわず、人間としての尊厳が失われないような衣生活に対する援助を心がけ、慎重に患者の衣類を選択することが大切である。

しかし、入院患者の多くは1日中病衣・寝衣で過ごすことを余儀なくされていることが多く、病院によっては、同じ色やデザインの病衣・寝衣を統一しているところもある。その背景には、和田⁽³⁾が指摘しているように1994年に患者の清潔確保、院内感染の防止などを目的に導入された「病衣貸与加算」があると思われる。しかし、この制度は1998年に廃止され、病衣・寝衣の選択は患者主体となった。以後病院の体制は、完全な私服体制をとっているところと、数種類の病衣・寝衣を準備して、私服との自由選択を通して病衣貸与を継続しているところに二分される。

病衣・寝衣の選択理由における先行研究では、色やデザインなどの患者の好み、洗濯や面会回数などの家族の負担、寝衣提供に対する清潔、耐久性、利益などの3つの側面から考えられている。それらの多くは、患者のアンケートをふまえたものであるが、病衣・寝衣としての多くの制約があり、個人のパーソナリティや個性を考慮したものにまでには至っていない。それは、選択理由が生理的な面を重視していることを物語っており、心理学的、社会的側面においては希薄であり、病院側の管理的思考が多くを占めていたといえる。

そこで、本研究では患者に私服との自由選択を前提に、数種類の病衣・寝衣を準備して病衣貸与を提供している病院に入院している患者を対象に、この体制を利用している患者と、個人で用意した衣服を着用している患者の衣服選択理由について明らかにし、衣服が闘病意欲に与える影響について考察することを目的とする。

II. 研究目的

1. 病院が提供する病衣・寝衣を選択している患者と、個人で用意した衣服を選択している患者の衣服選択理由を明らかにする。
2. 現在着用している衣服の不満の有無について明らかにする。
3. 1.と2.の結果から、入院中の衣服が闘病意欲に与えている影響を考察する。

III. 用語の定義

病衣・寝衣：患者が病院の病衣貸与制度を利用して着用している衣類。

病衣貸与加算：患者の清潔確保、院内感染の防止などを目的に1994年に健康保健法により導入された1人1日につき7点の算定で病衣を貸し出し提供する制度。1998年4月に廃止された。

(1) 齊藤美幸 鶴岡洋子「寝衣の種類と選択についてまとめてください」『臨床看護』第30巻第5号 2004 5月

(2) 林文代「病衣に関する看護研究の文献的考察」『三重看護』第13巻 1992 37~46

(3) 和田ちひろ「管理責任と規制緩和—今、入院患者が求めていること」『病院』63巻1号 2004 1月

病衣貸与体制：病院側が用意している数種類の形、デザインの病衣貸与と、患者側が用意した衣服のどちらを着用するかは、患者が自由に選択できる制度。

IV. 研究方法

1. 研究対象と期間

病衣貸与体制を導入しているY病院（総合病院）に入院中で、研究協力の承諾を得た患者62名を対象に、研究者が病室を訪問し、患者のベッドサイドで質問紙に基づいた聞き取り調査を実施した。

調査期間は2007年8月～9月である。

2. 倫理的配慮

対象者には調査の主旨を説明し、参加の是非や回答内容によって不利益が生じることはないこと、得られた全ての情報は研究以外に使用しないこと、および情報の匿名性の保持に十分考慮することを口頭で説明したうえで、承諾の得られた人のみを対象とした。

3. 調査項目

1) 闘病意欲に影響すると予測される変数

入院した時点で衣服選択の基準に影響しているかを確認するため、人口学的変数（性別、職業）と、入院している科、入院回数、入院期間、洗濯する人について回答してもらった。

2) 衣服選択理由と衣服に対する不満の有無とその要因

先行研究より、病衣・寝衣は患者のアンケートをふまえて、色やデザインなどの患者の好み、洗濯や面会回数などの家族の負担、寝衣提供に対する清潔、耐久性、利益などの3つの側面から考えられていることから、本調査では、衣服選択理由とその衣服の利点、欠点、および、衣服に対する不満とその要因について回答を求めた。

3) 衣服が入院生活に与える影響

毎日の入院生活の中で、衣服が直接闘病意欲に影響を与えているかどうかを調査するため、衣服に対する不満の有無との関係の中で、その理由について回答を求めた。

4. 分析方法

対象者の特性及び衣服と不満、衣服と闘病意欲との関係については Microsoft Excel を用いて統計処理を行い、クロス表を作成して t 検定と χ^2 検定で分析した。衣服の選択理由については、カテゴリー化して対象者の表現を忠実に簡潔な一文にまとめた。衣服に対する不満の理由と闘病意欲の内容についてはカテゴリー化後、要因として抽出した。

V. 結果

1. 対象の特性（表1）

対象となった入院患者62名中、妊婦を除く男性24名、女性30名の計54名を分析対象とした。衣服の種類としては、病衣40名（74.1%）、私服14名（25.9%）で、病衣を選択しているものが圧倒的に多かった。

性別では男性（病衣16名、私服8名）、女性（病衣24名、私服6名）で、t 検定の結果、女性の方が病衣の着用が有意に高い集団（ $p < 0.05$ ）であった。

年代別では60歳以上が、35名で64.8%を占め、入院科別では、内科が29名（53.7%）と最も多かった。

入院回数と入院期間は、初めてと2回目で半数以上の34名(63.0%)を占め、期間は1週間未満18名(33.3%)、1ヶ月未満13名(24.1%)、2週間未満と2ヶ月未満が同数の8名(14.8%)の順であった。

職業と家族との同居については、職業ついていない者が38名(70.4%)で大半を占め、48名(88.9%)は家族と同居していた。

1) 対象者の特性と病衣着用者との関係

家族と同居している者で病衣を着用しているものは、35名(72.9%)であった。同居家族がいない6名(11.1%)のうち、病衣を着用している者は5名(83.3%)で、比率としては同居家族がいない者のほうが、病衣を着用している割合が高かった。

洗濯は46名(85.2%)が、家族に洗濯を依頼していた。病衣と私服を比較した場合は、病衣を着用しているの方が、本人で洗濯している割合が高く6名中5名(83.3%)であった。

入院科別と衣服との割合は、整形外科に入院している者が、病衣を選択している比率が最も高く83.4%、次いで外科78.9%、内科69.0%の順であった。

入院回数と衣服との関係における病衣選択者は、入院回数初めてが14名(73.7%)、2回目が10名(66.6%)、3回目が6名(77.8%)で、大差はなかったが、5回目以上が8名中7名(87.5%)で高い割合を示した。

また、入院期間と衣服との関係で、病衣を選択している者は入院期間3ヶ月以上が3名中3名で100%であった。次いで2ヶ月未満が7名(87.5%)、2週間未満の6名と3ヶ月未満の3名は同率の75.0%であった。

最も少なかったのは、1ヶ月未満の8名で、61.5%であった。

2. 衣服の選択理由

1) 病衣の選択理由

病衣の選択理由としては、洗濯が楽で家族の負担が軽減される、安くて経済的、いつでも着替えられて衛生的など、病衣の利点としての理由が挙げられた。(表2)

2) 私服の選択理由

私服選択理由としては、病衣は病人であることを印象付ける、病衣はサイズが合わないなど、病衣に対する抵抗と、着慣れているものは落ち着く、着心地が良い、デザインやカラーが選べるなどの私服の得点として挙げられたものに2分された。(表3)

3. 衣服に対する不満

現在着用している衣服に対して、不満が有ると答えた者25名(46.3%)、無いと答えた者29名(53.7%)で、半数以上は現在の衣服に対して不満は感じていなかった。しかし、病衣に対しては半数の20名(50.0%)が不満を感じていた。

1) 性別との関係

病衣に対する不満を性別との関係で比較した場合、女性が14名(58.3%)、男性が6名(37.5%)で、女性のほうが不満を感じている割合が圧倒的に高かった。

私服を選択している者でも5名(35.7%)は不満を感じていたが、9名(64.3%)は無いと答えており、女性と男性を比較した場合は、男性のほうが圧倒的に不満は少なかったが、病衣と私服および衣服に対する不満の有無の間には有意差はみられなかった(表4)。

2) 衣服に対する不満理由

不満の内容としては、12項目が挙げられ、それらをカテゴリー化した結果、恥辱感、個の尊厳の喪失感、不

合理性、不快感、その他の4つの要因とその他で構成されていた。

恥辱感には、「胸元がはだけるので、面会するときなどに恥ずかしい。汚れが目立つ、古さを感じる、丈が短いなどで外出できない。」など、対人的要素を含む社会的存在としてのあり方を問う内容が含まれていた。

個の尊厳の喪失感では、「男女の区別がなく、誰が着たかわからない。病人の感じがする。体のラインに合わないのだからしく感じる。」など、内的な要素が多く含まれていた。

不合理性と不快感では、「抗がん剤服用のときにズボンの締め付けが気持ち悪い。術後、創部にズボンのゴム、縫い代があたると痛い。点滴中の脱ぎ着が難しく、ストーマの位置に困る。」「肌触りが悪い。洗濯のりの臭いがきつい。保温性がない。」など、身体に対する直接的な要素が含まれていた。(表5)

4. 闘病意欲と衣服との関係 (表6)

闘病意欲の有無については、有ると答えた者20名(37.0%)、無いと答えた者34名(63.0%)で、闘病意欲を失っている者が半数以上を占めていた。闘病意欲が無いと答えた者の中で、病衣を選択している者は27名で67.5%を占め、性別では、男性13名(81.2%)、女性14名(58.3%)で、男性のほうが、闘病意欲を失っている割合が高かった。私服を選択している者でも7名中、5名の男性が無いと答えており、全体的に女性よりも男性のほうが低く、衣服と闘病意欲との間に有意差を認めた。 $(\chi^2$ 検定、 $p < 0.01$)。一方、私服を選択している者で、有ると答えた者は7名(50.0%)で、病衣よりも私服を着用しているもののほうが高かったが、男女差はなかった。

5. 衣服が闘病意欲に影響を与える要因 (表7)

衣服が闘病意欲に影響を与える要因としては、闘病意欲を上昇させるものと低下させるものにカテゴリー化され、共通要因として病気の認識、社交性の認識、日常生活の認識の3つの要因が抽出された。

病気の認識においては、闘病意欲を上昇させるものとして、「病衣を着ることで病気と向き合う。諦めて治すことに専念」などが含まれ、低下させるものとしては、「病人の印象が強く、病気であることを実感する。」など、病気の受容の有無に関することが影響していた。

社交性の認識においては、闘病意欲を上昇させるものとして、「明るい色や、入院生活を楽しめる服装」などが含まれ、低下させるものとしては「外出する気持ちが低下。家族以外の面会が嫌。」など、直接気分作用する要素が含まれていた。

日常生活の認識においては、家庭での生活により近い状況であるかどうか、闘病意欲に影響していた。

VI. 考察

寝衣・病衣の選択基準と闘病意欲との関連性について調査した結果から、以下のような考察を得た。

1. 対象の特性

病衣を選択している者の割合が男性よりも女性のほうが高かったのは、入院対象者が女性のほうが多く、対象の88.9%が家族と同居しており、85.2%の者が家族に洗濯を依頼していることが考えられる。家事の負担を日頃から経験している女性は、家族への負担を軽減したいという思いが強く作用しているのではないかと考える。

また、60歳以上が78.9%を占めていることと、職業についていない者が70.4%を占めていることは、面会を訪れる人が家族や親戚に限られてくる可能性が高く、病衣を着ていることによる他者からの視線も緩和されるのではないかと考えられる。

入院回数と病衣との関係では、5回目以上が87.5%と高い割合を示したのは、入院生活の慣れにより、恥辱感や個の尊厳に対する思いの低下、家族に対する負担の軽減が影響しているのではないかと考えられる。

入院期間との病衣との関係においては、バラつきが多かった。1週間未満と2週間未満は、短期入院であるため病衣の簡便性が重視された結果ではないかと考える。一方、3ヶ月以上は長期入院による家族の負担や、闘病意欲の低下など、個の欲求が低下していることによることが影響しているのではないかと考える。

2. 衣服の選択理由

病衣の選択理由について最も多かったのは、「安く借りる事が出来る上に、洗濯の手間が省けて家族の負担が軽減される」であった。入院生活を送る上で、家族の存在は大きく影響する。その中で、少しでも家族の負担を軽減しようとする思いは、家族への思いやりや、遠慮など、その患者の置かれた状況で、様々な意味をなしているものと考ええる。

また、病気によっては利便性や機能性を優先した、治療の受けやすさなどを考慮した結果でもあると考える。それは、病衣の工夫としてなされてきた、利便性、機能性、衛生面に対しての患者の評価が高かったことから伺える。一方、私服を選択した理由については、病衣の不満要因を克服するものであり、利便性よりも衣服のもつ社会的、心理的影響要因を優先した選択ではないかと考えられる。

3. 衣服に対する不満

病衣に対する不満要因として抽出された4つの要因のうち、恥辱感、個の尊厳の喪失には、衣服の持つ社交性や心理性の欠如が現れているものと考ええる。特に恥辱感、他者からの視線を感じたときに感じる恥ずかしく屈辱的な感情であり、衣服の持つ社交性と強い関係にあるものと思われる。女性は特に他者の視線を気にし、身だしなみを整えたいという気持ちが強いことから、恥辱感には過敏に反応するものと考ええる。個の尊厳の喪失は、自分自身に視点を向けたときに感じる喪失感情であり、衣服の与える心理的要因との関係が強いと思われる。入院中であっても、自分がどのように在りたいか、衣生活でも尊重されたいという思いから出現する感情であると考えられる。

また不合理性や不快感については、病状に合わせた個別性をより考慮した機能性が求められているものと考えられる。

しかし、女性は不満が有りつつも病衣を選択している傾向にあることは、その背景などが大きく影響しており、病衣の簡便性を重視しているからではないかと考えられる。また、男性の病衣に対する不満が比較的少なかったのは、一般的に合理性を重視するといわれている男性特有の性格的なことが影響しているのではないかと考える。すなわち、男性は病衣を選択することによって、入院中であることを割り切って考えることが可能であるために、不満が少ないのではないかと考える。

4. 衣服と闘病意欲との関係

衣服と闘病意欲との関係からは1%水準で有意差を認めた。闘病意欲を上昇させるものと、低下させるものには、病気の認識、社交性の認識、日常生活の認識の3つ共通要因から構成されていた。

病気の認識では、病衣を着用することを個人が前向きにとらえた場合、気持ちの切り替えとして病気と向き合う認識が、闘病意欲の上昇につながっているのではないかと考える。反面、後ろ向きにとらえた場合は、病気になってしまったという思いや、病気であるがゆえにという思いが、新たな希望を失わせることになり、闘病意欲を低下させる要因になるのではないかと考える。

社交性の認識では、人間は社会的存在であるといわれているように、社会で生活するための手段として、衣の持つ人間独自の身だしなみ、装いとといった他者の視線を意識した社会人としての存在意識が強く作用する。それは個人の尊重としても問われることであり、その可否によって、闘病意欲の上昇や低下に大きく影響してくるの

ではないかと考える。

日常生活の認識では、多くの人は家庭生活から入院生活へと移行し、退院後は家庭生活へと戻り社会に復帰することが前提とされている。入院中は治療の時間や看護業務に合わせた時間帯が決められているため、個人のペースで闘病生活を送ることは難しい。しかし、家庭生活に戻ることを考慮した入院生活を送ることでスムーズな家庭復帰につながると思われる。そのため、衣生活でも家庭での日常のリズムを保つことにより、家庭生活の延長として入院生活を捉えることにより、前向きに闘病生活を送れるのではないかと考える。

このように、衣服と闘病意欲との関係には、衣服の不満要因と共通するものが多く含まれていた。したがって、闘病意欲を上昇させる要因として抽出された内容は、私服の利点と大きく関係していた。さらに、女性のほうが男性よりも闘病意欲が高いという性別にも大きく影響していた。

総合実習で出会ったある患者は、危険回避のためにつなぎ型の予防着を着用されていた。数日後、予防着から家族が用意されたパジャマの着用に変更になったとき、患者はパジャマを着て「ああ、生きていて良かった。」と喜びを表された。すなわち、その人に応じた快適な衣服を着用することは、生活の質を向上し、人生の楽しみや意味を見出すことと大きく関連しているものと思われる。

以上から、看護ケアとしては生理的な機能を損なわず、人間としての尊厳を失わないような衣生活に対する援助を心がけ、慎重に患者の衣類を選択することが大切であると考えられる。そのためには、病衣の簡便性、機能性を活かしつつ、病衣だけではなく、私服の患者も安い値段で、洗濯のサービスを受けることができるなどのサービス提供を構築することが必要ではないかと思われる。

Ⅶ. まとめ

1. 対象の特性は、病衣選択者74.1%で、t検定5%水準で女性の方が病衣の着用が有意に高い集団であった。
2. 病衣を選択する理由は、経済的で家族の負担の軽減、及び、いつでも着替えられて衛生的などの病衣としての利点であった。
3. 私服を選択する理由は、病衣に対する抵抗感と、デザインやカラー、サイズが選べて動きやすい、着心地が良かったために落ち着くなどの私服としての得点に二分された。
4. 病衣に対して不満を持っている割合は50%であったが、性別では女性のほうが男性よりも20%以上高かった。
5. 病衣に対する不満理由は恥辱感、個の尊厳の喪失感、不合理性、不快感の4つの因子とその他で構成されていた。
6. 衣服と闘病意欲と性別との関係では、男性よりも女性のほうが闘病意欲は高く、病衣と私服と闘病意欲の関係では病衣のほうが χ^2 検定1%水準で有意に低かった。

参考文献

- (1) 山本ひとみ 大山扶久子 「『患者のみだしなみ』へのケア」『Nursing Today』Vol.21, No.1 2006 1月
- (2) 西田直子 「衣服の選択と着脱」『京都医大医短紀要』8:1998 81-86
- (3) 青山みどり 堀内雅子 「入院患者の病衣選択と闘病意欲(第1報) - 身体症状、活動範囲、生活の自立の程度と病衣に対する関心度 -」『群馬県立医療短期大学紀要』第6巻 1999 9~17
- (4) 名古屋市立城北病院内科病棟5階看護研究チーム 「患者の主体性を守る脱パジャマの試み」『看護実践の科学』2002. 9月

- (5) 角田直枝「動物という対象の“生き方”を尊重し、探究するということ」『看護管理』第16巻3号 2006 3月
- (6) 齊藤勝司「動物のふり見て、我がふりを知る?! ヒトと動物の生態行動学入門」『Relation』 vol.13 2002
- (7) 神田治英「人間らしく尊厳ある生き方・働き方めざして」『月刊女性&運動』2000 12月

表1 対象の概要 (n=54)

		病衣 人 (%)	私服 人 (%)	小計 人 (%)
性別の衣服	男性	16 (66.7)	8 (33.3)	24 (44.4)
	女性	24 (80.0)	6 (20.0)	30 (55.6)
年齢別	20代	1 (33.3)	2 (66.7)	3 (5.6)
	30代	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (11.1)
	40代	4 (100.0)	0 (0.0)	4 (7.4)
	50代	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (11.1)
	60代	9 (64.3)	5 (35.7)	14 (25.9)
	70代	6 (60.0)	4 (40.0)	10 (18.5)
	80代	10 (18.5)	1 (6.3)	11 (20.4)
入院科別	整形外科	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (11.1)
	内科	20 (69.0)	9 (31.0)	29 (53.7)
	外科	15 (78.9)	4 (21.1)	19 (35.2)
入院回数	初めて	14 (73.7)	5 (26.3)	19 (35.2)
	2回目	10 (66.7)	5 (33.3)	15 (27.8)
	3回目	7 (77.8)	2 (22.2)	9 (16.7)
	4回目	1 (50.0)	1 (50.0)	2 (3.7)
	5回目以上	8 (88.9)	1 (11.1)	9 (16.7)
入院期間	1週間未満	13 (72.2)	5 (27.8)	18 (33.3)
	2週間未満	6 (75.0)	2 (25.0)	8 (14.8)
	1ヶ月未満	8 (61.5)	5 (38.5)	13 (24.1)
	2ヶ月未満	7 (87.5)	1 (12.5)	8 (14.8)
	3ヶ月未満	3 (75.0)	1 (25.0)	4 (7.4)
	3ヶ月以上	3 (100.0)	0 (0.0)	3 (5.6)
職業	有	12 (75.0)	4 (25.0)	16 (29.6)
	無	28 (73.7)	10 (26.3)	38 (70.4)
同居者	有	35 (72.9)	13 (27.1)	48 (88.9)
	無	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (11.1)
洗濯者	本人	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (11.1)
	家族	34 (73.9)	12 (26.1)	46 (85.2)
	その他	1 (50.0)	1 (50.0)	2 (3.7)

表2 病衣選択理由

- ・洗濯が楽なので家族の負担が減る。
- ・経済的。
- ・いつでも着替えることができ、衛生的。
- ・病衣のほうが動きやすく着脱しやすい。
- ・診察が受けやすい。

表3 私服の選択理由

- ・病衣は病人であることを印象付けるから。
- ・病衣はサイズがあわず胸元がはだけるから。
- ・デザインやカラーが選べるから。
- ・入院中でも家庭での生活と近づきたいから。
- ・着慣れているものは落ち着き、動きやすく、着心地が良い。
- ・自由に着替えたいが、度々頼みづらいから。
- ・家にあるものを使うことでお金がかからないから。

表4 衣服に対する不満と性別との関係
n = 54 男(病衣16名、私服8名) 女(病衣24名、私服6名)

	有		無		計 人
	病衣 人 (%)	私服 人 (%)	病衣 人 (%)	私服 人 (%)	
男	6 (37.5)	1 (12.5)	10 (62.5)	7 (87.5)	24
女	14 (58.3)	4 (66.7)	10 (41.7)	2 (33.3)	30
小計	20 (50.0)	5 (35.7)	20 (50.0)	9 (64.3)	54
計	25 (46.3)		29 (53.7)		54

表5 病衣に対する不満の理由

恥辱感	<ul style="list-style-type: none"> ・浴衣タイプは胸元がはだけるので、面会のときなどに恥ずかしい気持ちになる ・丈が短く、汚れが目立ち、古さを感じるなどにより、病衣では外出できない。
個の尊厳の喪失感	<ul style="list-style-type: none"> ・男女の区別がなく、誰が着たのかわからない。 ・病人の感じがする。 ・体のラインに合わないのでだらしく感じ、おしゃれができない。
不合理性	<ul style="list-style-type: none"> ・抗がん剤服用のときにズボンの締め付けが気持ち悪い。 ・術後、創部にズボンのゴム、縫い代があたると痛い。 ・点滴中、脱ぎ着が難しく、ストーマの位置に困る。
不快感	<ul style="list-style-type: none"> ・木綿は肌触りが悪い。 ・洗濯のりの臭いがきつくて、気持ち悪い。 ・保温性がなく、寒い。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・着替えを持って来てもらうのを頼みづらい。

表6 衣服と闘病意欲と性別との関係
n = 54 男 (病衣16名、私服8名) 女 (病衣24名、私服6名)

	有		無		計 人
	病衣 人 (%)	私服 人 (%)	病衣 人 (%)	私服 人 (%)	
男	3 (18.8)	3 (37.5)	13 (81.2)	5 (62.5)	24
女	10 (41.7)	4 (66.7)	14 (58.3)	2 (33.3)	30 *
小計	13 (32.5)	7 (50.0)	27 (67.5)	7 (50.0)	54
計	20 (37.0)		34 (63.0)		54

(衣服 闘病意欲 性別 *p>0.01)

表7 衣服と闘病意欲の関係要因

闘病意欲を上昇させる内容	要 因	闘病意欲を低下させる内容
<ul style="list-style-type: none"> ・病衣を着ることで病気と向き合わなければならない。 ・病気だから諦めて、治してからオシャレをする。 	病気の認識	<ul style="list-style-type: none"> ・病人の印象が強く、病気であることを実感する。 ・病気でオシャレにも気を使えなくなってしまった。
<ul style="list-style-type: none"> ・明るい色だと元気が出る。 ・入院生活を楽しめる服装なら闘病意欲をもてる。 	社交性の認識	<ul style="list-style-type: none"> ・外に出かけようという気持ちが低下する。 ・家族以外の面会が嫌になる。
<ul style="list-style-type: none"> ・家と近い感覚でいることで前向きになれる。 	日常生活の認識	<ul style="list-style-type: none"> ・一日中病衣でいると生活リズムが崩れる。